OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒『画觿』翻刻・解説
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2007, 2007, p. 49-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報2007　（大阪大学大学院文学研究科・文学部　懐徳堂センター　二〇〇七年二月二八日発行）

中井履軒『画觿』翻刻・解説

湯城吉信

【解説】

本稿は、履軒の和文集『画觿』の翻刻である。

〔題意〕

『画觿』の「觿」は「くじる」すなわち「掘り下げる」「探る」の意味で、注釈書の名前に付けられることが多い。履軒には、動植物の画を描いた『左九羅帖』という画帖がある（口絵参照）。『画觿』では『左九羅帖』に登場する動植物が順番に解説されている。なお、後に付け足された補編には、画も添えられている。

〔成立年〕

成立は、享和元年（一八〇一）の「享和辛酉水戸浦所捕河童図」以後であると考えられる（以下のテキストの紹介を参照）。その他、履軒が内容的に大いに参照している『毛詩品物図攷』は天明五年（一七八五）刊であり、これ以後の成立であることは確実である。

〔執筆意図〕

履軒が取り上げているのは、名実が乖離していると考えた動植物である（「樺」「黄鳥」「蓬莱山」補編「桂」など）。序文はないが、名実一致を目指すのが本書の執筆目的と言えるであろう。名前を議論対象とするものであるため、多く語源に説き及んでいる。

〔執筆背景〕

履軒は、岡元鳳『毛詩品物図攷』や江村如圭『詩経名物辨解』を読んでいた。履軒が『詩経雕題』に記している和名は、基本的に『毛詩品物図攷』によっている。『毛詩品物図攷』については、中之島図書館に履軒著『毛詩品物図攷雕題』らしきテキストが現存している（井上了「大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について」『懐徳堂センター報』二〇〇四）。『詩経名物辨解』については、履軒の蔵書目録『天楽楼書籍遺蔵目録』（天保五年（一八三四））に、『毛詩品物図攷』とともに、その名（『詩経名物辨解』先生頭書）が見える。『画觿』の内容は、上記の二書に基づく妥当な説が多い。

〔履軒に独特な説〕

その一方で、既存の名称を用いて名実一致を目指すだけでなく、冒頭の「樺」など、自ら命名を試みている箇所がある（「瓊花（桜）」「寄生木」「雌蠣」「薬楓」「うつ草（「卯花」改め）」など）。これらの説は、良く言えば

独創的な、悪く言えば独断的なものが多いが、履軒の思考を窺う上で貴重な材料だと言えよう。

〔テキスト〕

関西大学所蔵本（請求記号：C/460.41/N1/1、図書番号：001737040、以下「手稿本」と略称）、大阪府立中之島図書館所蔵本（甲和321、以下「中之島本」と略称）、大阪大学懐徳堂文庫所蔵本（新田文庫E303、以下「懐徳堂本」と略称）が確認できる。

(1) 関西大学所蔵本（手稿本）

関西大学所蔵本は手稿本だと思われる。縦二五・〇㎝、横一七・〇㎝。列帖装。末尾は、二五葉白紙が続いている（内、二葉に、「藻」と「椿」らしき画が貼られている）。同書は、昭和三四年一月二五日、羽倉敬尚氏より同図書館が一三六五〇円で購入したもので、純貴重書として岩崎美隆文庫に所蔵されている（『関西大学所蔵岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録』〈関西大学図書館シリーズ第十五輯〉関西大学図書館、一九七六、及び同図書館司書坂本翼氏談に拠る）。同図書館でマイクロフィルム化されている他、中之島図書館に複製がある。同書の末尾には、羽倉敬尚の以下のような識語（貼り紙）がある。

画觿（ケイ）

本書は大阪懐徳書院教授中井履軒（名積徳　竹山の弟）の自筆自著にして画も自画と思はる。觿は携と同意の字なり。卯花画の前、即ち本文の終「ふかうど」は履軒幽人自号の幽人を和語にて記せるなり。

羽倉敬尚

中之島図書館所蔵本の所蔵カードが「がけい」となっているのは、この識語に基づくものであろう。その他、夾板（板帙）には「昭和卅三年極月　羽倉敬尚」とある。

手稿本である傍証として、先に述べた末尾の白紙と以下に述べる貼り紙とが挙げられる。末尾の白紙は、おそらくその後の追加のために準備されたものであったのであろう。末尾部分は補編であり、随時書き足されていく性格のものだからである。貼り紙については以下の三箇所がある。一つは、「樺」の部分の「今の世に…」以下及び「御寄進」の貼り紙である。もう一つは、「穀」の中の「花かつみ　重複削るべし…」と書かれた部分に「栲は無文字なり…」が貼られている。さらにもう一つは、「扶桑木」の『日本書紀』の引用（漢文部分）の後の「右の文かみしもおちかへりて…」の上に貼り紙がされている。（この部分は、懐徳堂本では、簀山が削るのは惜しいと述べ、注を付けて復活している。）

なお、「水蠆」の部分に、中之島本に見える「水戸浦所捕河童図」は挟まれていない。

その他、手稿本で注目すべきは補編の画の精密さである。履軒がこのような画を描けたとすれば感服するしかないが、あるいはプロの画家に依頼したものであるかもしれない。

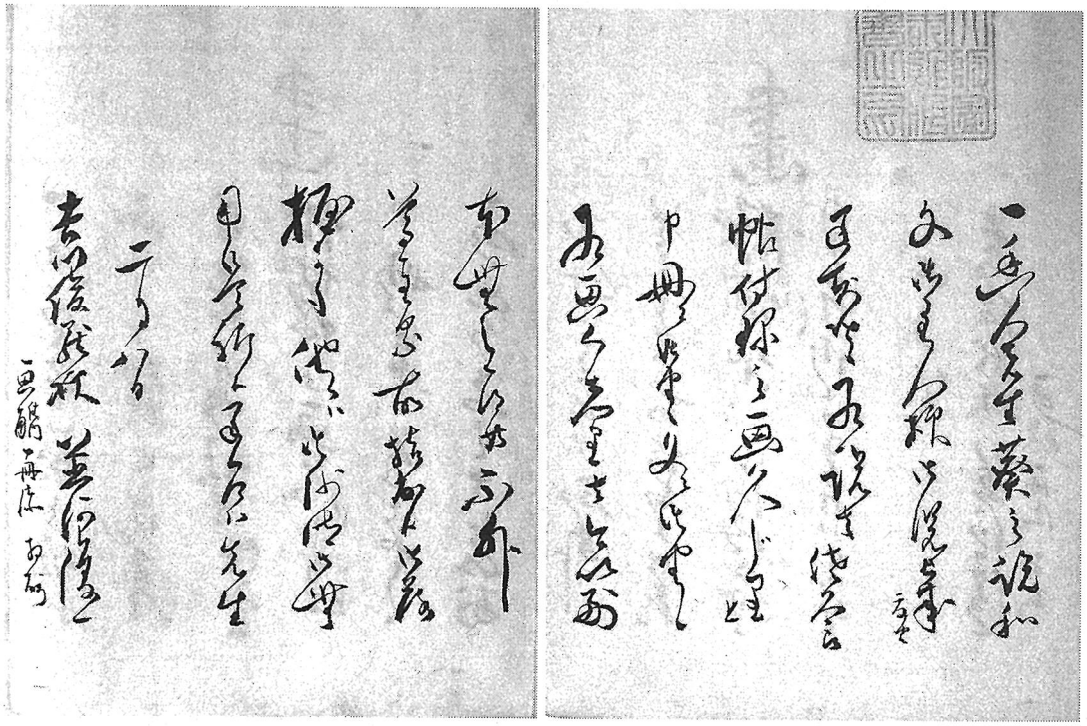
(2) 中之島図書館所蔵本（中之島本）

中之島図書館所蔵本は、『左九羅帖（さくらちょう）』と合冊され、『樺帖』という書名になっている（外題『樺帖　乾冊』が『左九羅帖』、外題『樺帖　坤冊』が『画觿』）。縦二六・五㎝、横一九・二㎝。袋綴本。同本は、手稿本を敷き

写しにした影写本らしく、字が手稿本にぴったり一致する。初代豊田文三郎遺書。明治二八年の受入印がある。手稿本、懐徳堂本ともに見えない「水戸浦所捕河童図」が「水蝲」の部分に貼られている。中之島本『左九羅帖』（『樺帖　乾冊』）の「水蝲」図は懐徳堂本と違う（口絵参照）が、これは「水戸浦所捕河童図」によるものである。「水戸浦所捕河童図」は履軒の抜き書きである可能性が高いが断定はできない（朱　筆や墨筆の塗抹があるのは写した証拠ではないかと思われる）。中之島本の『左九羅帖』は画が精密で、懐徳堂文庫本とは筆致を異にする（口絵参照）。懐徳堂文庫本『左九羅帖』では荇菜（ジュンサイ）や珠母（真珠貝）に雲母（きら）が塗られているが、中之島本にはない。『左九羅帖』については、おそらく懐徳堂文庫本が履軒手稿本で、中之島本は（おそらく山片家が）画家に依頼して写させたものであろう。中之島本は、読みにくい崩し字の横に朱筆で楷書体を記している箇所があり、解読の助けになる。

また、巻頭には以下のような書簡の写しもある。同書簡によると、題の読みは「えくじり」が正しいと確認できる。また、並河寒泉から当時の山片家番頭吉川俊蔵（『懐徳堂―近世大阪の学校』、大阪市立博物館、六〇頁による）へと『画觿』が貸し出されたこともわかる。

一幽人先生葵之説和
文御主人様御覧被成度由
承知仕候右説は佐久良
帖付録之画くじりと
申冊に御座候文ニ御座候
右画くじりは今以別
本無之候得共不外



尊主家故指出候御落
握可下候他へは御沙汰御無
用是折々承度候　先生
二月八日
吉川俊蔵様　並河復一
画鱗　一冊添　拝酬

＊以上の翻刻は大阪大学の坂井二三絵氏にご教示いただいた。

また、以下のような識語があり、弘化五年（一八四八）に、天保期の山片家の当主重信（『懐徳堂―近世大阪の学校』、大阪市立博物館、六〇頁による）が写した写本であることを確認できる。

くわいとく堂　そう書を
もってうつしおへぬ
しげのぶ
弘化五戊申きさらぎ二十五日

(3) 懐徳堂文庫本（懐徳堂本）

縦二九・〇㎝、横一九・五㎝。列帖装。懐徳堂本は、書き間違いを見せ消ちせずに「・」をつけて横に訂正している箇所が多数あり、写本であることが確認できる（補編の「楓」の部分にも写す途中の紙が見える）。「扶桑木」の部分に履軒の高弟竹島簣山の注が見えることから、竹島簣山による写本であると考えられる。なお、懐徳堂本『画鱗』補編の画と手稿本の画は似ているが重なりはしない。

本稿は、手稿本を底本にしたが、明らかな誤りと思われる箇所は他のテキストにより改めた（【校勘】において明記）。補編の画も手稿本（関西大学所蔵本）のそれを採用した。翻字は、現代通用の仮名・漢字に改め、適宜句読点と濁点を施した。踊り字はかなに改めた。段落は原文による。また書名に『　』を、引用部分や名称を問題としている箇所には「　」を施した。テキストの違いは【校勘】に示した。また、テキストの説明を〔　〕づきで示したところがある。

紙幅の関係上、本稿では『画鱗』の翻刻に校勘を付すにとどめる。『画鱗』の注釈及び内容の詳細な分析については、稿を改め、『杏雨』（武田科学振興財団・杏雨書屋編）に発表する予定である。あわせてご覧いただければ幸いである。

【項目一覧】

＊項目名の後の数字は、『左九羅帖』への対応を表す数字。

〈本編〉

樺　瓊華　サクラ　カバザクラ　カニバザクラ　一
青鳥　青雀　ウグヒス　一
黄鳥　鶯　黄鸝　倉庚　カウライウグヒス　二
海棠　甘棠　沙棠　二
棣　常棣　唐棣　ハネズ　三
薇　カガミグサ　ワノサンキライ　三

蔦　寄生草　ツタ　ヤドリギ　四
女蘿　松蘿　寄生草　サガリゴケ　四
梧桐　椅　アホギリ　アホニヨロリ　五
柮　カシ　五
垣衣　青苔　苔衣　石衣　コケ　コケゴロモ　六
莽　榛同　アサガホ　六
蠑螈　ヰモリ　七
蜥蜴　トカゲ　七
蝘蜓　ヤモリ　守宮　七
花かつみ
榛　ササグリ　シバグリ　八
莱　シバ　八
蕪　九
鶏　天鶏　天鷄　雲雀　告天子　ヒバリ　九
鸚鵡螺　フメツ　十
われから　貝　貝光　コヤスガイ　十一
藻　モ　十一
鴎　ヌエ　ヨタカ　十二
梟　鴟同　フクロウ　十二
鵂鶹　ミミヅク　十二
藺　蒻同　藤　フヂ　十三
穀　楮　構　コウゾ　ユフ　カヂ　十三

すみれ　ゲンゲ　十四
つぼすみれ　十五
著　ハギ　メド　十六
蟋蟀　キリギリス　十六
芄蘭　ユウガホ　十七
蛇　ハエ　クチナハ　十八
蝮　ハミ　ヘビ　マムシ　十八
水蛭　河童　カハタラウ　カハツハ　十九
蒿　ヨモギ　二十
蕭　ヨモギ　二十
瓠　フクベ　二十
匏　フクベ　壺　瓢　葫蘆　廿一
瓜　ウリ　ナウリ　廿一
なき　葱　ヒトモジ　ネギ　ネブカ　廿二
こなき　胡葱　アサツキ　廿三
荇菜　蓴　茆　ジュンサイ　廿三
牡蠣　フタミガキ　ヲキガキ　廿四
雌蠣　カキ　廿五
珠母　廿五
やまぶき　欵冬　ツワ　廿六
葵　三茎草　三枝　福草　蕗　フキ　アフヒ　サキクサ　廿七
蓬莱山　博山　不二山　富士山　フジ　廿八

扶桑木

〈補編〉

卯花
うつ木
椿　ツバキ
山茶　サザンクハ
瑩
瓊
柀　マキ　スギ
榕　サカキ　シキミ
茲　附　促織
莞　ツクモ
しのぶ
おがたま
楓
桂　木犀
木葉石
たこふね
穀（補足）　＊画なし。
橘　＊画なし。

【翻刻】

〔項目名の後の『左九羅帖』への対応を表す数字（朱筆）は、懐徳堂本にはない。〕

樺　瓊華　サクラ　カバザクラ　カニバザクラ　一〔口絵〕

「樺」は世中の「サクラ」の母なりけり。もろこしのむかしよりこの木の皮をとりて鞍・刀をかざる類いとおほし。薬にもしるしあり。ここにても東北国におほし。西国にもあり。深山に大木あり。書籍の印板にもちゆる「桜板」てふものは大かたは「樺」なりとかや。わが国の土地によくあひたるにや。変生多し。奈良の都の「八重ザクラ」「山ザクラ」「糸ザクラ」「彼岸」などいひわかつはさらなり、其数はしられず。世に「桜」の字を用ゆるはひがごとにこそ。もと「桜桃」といふ木あり。ちいさき実なる故にや「みどり子の桃」てふ心にて「嬰桃」とはじめは書きけらし。後に「木」を加へてけり。されば「桃」をはなれては別に「桜」といふ木はなきなり。いかなればこの国にてかかる文字を用ひきにけん。詩賦などに入たるはかたはらいたしや。

「樺」は総名なるを、とりわきては「カバザクラ」といふ。「カニバザクラ」ともいふ。「カバ」の木立、花のやう、今の「サクラ」にかはることすくなし。唯、花の数多からで、ひかりおとれり。いかなれば其子其孫とうまれわかれたるは、ひかりにほひ世にならぶものなし。されば花とだにいへば「サクラ」のこととなりぬ。もろこしにも牡丹・海棠にかかるためしありとなん。司馬相如の賦に「華楓枰櫨」といへり。「華」はすなはち「樺」なり。むかしの人さばかりめづる心もなく、また世のするをさとりしにもあらぬを、よくぞ「華」の「木」てふ文字をさだめおきたる。外に

文字をたづぬるはあぢきなしや。

「海棠」もことたがへり。詩賦にも用ゆまじきことにぞ。「サクラ」とは、この木の本称なれば、すべて大小諸種をあはせていふべし。「カバ」とは「皮」てふ心なるべし。皮の用、わきてよろしきを「カバザクラ」といひ、八重にさくを「ヤエザクラ」といひ、彼岸会にさくを「ヒガンザクラ」といふ。名と氏と同独のわかちあるがごとし。おしなべていへばみなみなひとつ「サクラ」なりけり。「サクラ」すなはち「樺」にこそ。

〔以下、「～なりとぞ」まで手稿本では貼り紙〕

今の世に「山桜」といふは、里にてわかれたる一種なり。古歌によめる「山桜」にあらず。今、吉野蔵王堂より下麓までの花は里人のうへたる今の「山桜」なり。まことの吉野山の「山桜」にあらず。大和の宇多郡山中に白き花の桜おほし。其あたりにては「深山桜」といふ。其色、梨花のごとし。青みさへそひたり。これぞまことの吉野の桜なりけり。即、「樺」なるべし。安禅より上、天嶺道*といふあたりにも大木の桜ありといふ。談峯より東よきが峯まで一里ばかり道の傍に大木多し。二囲三囲なるもあり。いづれも「樺」なるべし。土佐てふふるき画に吉野山をかきたるをみたりしに、みな白花にて赤きにほひはすこしもなし。今様はしからず。筆も世につれてかはれるなるべし。近きころより池田の里のあたり、李をおほく植たり。花の盛なるころ伊丹の里よりながむれば、まことに雪とのみぞあやまたる。昔の「山桜」もかかるながめと思ひしらるる。もし今の「山桜」なりせば、人丸が目に雲とは見え*がたかるべしや。雲と見、雪と疑ふも、ひたすらに白き故にあらずや。

「山桜」とは別種の名なり。「八重」「彼岸」に対していふ。古歌に出たるは皆しかなり。今の世の「山桜」てふ名とこころはおなじ。「山に咲たる桜」といふにはあらず。世にいふ山桜に大木なし。寿も短かしとは里の「山桜」なり。まことの「山桜」にあらず。

蔵王堂より下に桜を植たるは今より二百餘年前なりとぞ。摂州平野郷の末吉氏これ植けん人なりとぞ。

〔以下、「～兵衛丞殿」まで貼り紙〕

御寄進

桜一万本植置林道作申候。依而御施物青銅百貫文慥ニ請度申候。猶与介殿可有演説*候。以上

天正七年己卯十二月吉日　重介　名判

権介　〃
新介　〃
権丞　〃
左近兵衛　〃
甚大夫　〃
嶋介　〃
右衛門　〃
図書　〃
勘丞　〃

摂州平野末吉勘兵衛丞殿

【校勘】○天…「大」のはず。○いふ…懐徳堂本はこの後に「あり其」がある。○見え…懐徳堂本「みえ」。○演説…懐徳堂本「演舌」。

六朝のころ江南に瓊華観といふ道宮ありけり。この庭に「瓊華」といふ名木あり、よりて観の名ともせしなり。天下に唯ひと木の花なり。まことに「瓊」の「花」といふにたがはず。花のころは遠近の人つどひ来てめで

まどひぬ。いとふるき木にてぞありける。「瓊」てふ玉は今いふ瑪瑙なめり。白きに薄紅をいろどりたり。かの花これに似たるにこそ。隋煬帝の世となりて奢のあまりに、この名花をながめんとて、みやこより千餘里の間、川をほり、道をつくらせけり。前の年よりこのいそぎにて、天が下ゆすりて民のなげきとなれりける。さて春になりて、みゆきなりける。かの川に龍舟をうかべなどしたりけれど、いとはるけき道にしあればやうやう春のなかば過るころ観のこなた十里ばかん江都といふ処につきぬ。やがて人を馳て花のやうをとはせ給ひしに、「其あけの日なん盛なるべし」と奏しければ、煬帝よろこびて、「旅のつかれはさることなれど、かかる企をなして花の盛におくれなばいと口惜かるべし。あくる朝の横雲につれて観にいたれ」と勅を下したまひければ、もろもろのつかさづかさゐもねずしていとなみいそぎけるに、この夜、うしみつすぐるころ、遽にそらかきくもり雨うちそそぎて風のおといとおどろおどろしく、「かくてはいかが」と人みなすこしうちためらふ*を、煬帝気をいらちて「何条さることやはあるべき。風神雨師の朕がために道を清むるにこそあなれ、いかで朕にあだをなすべき。とく車をいだせよ」とて雨風をつきてかけ出し給ふ。従者などは、ころび、たふれて、あさましきまでにぞありける。辰の時ばかりに観にいたりつきぬ。さて其庭には水たたへて、泥わきかへり、花はひとひらもなかりけり。あなあやしと観の道士をめしいでて其やうをたづねたまへば、道士謹て奏すらく、「よべの雨風のはげしさなん、魔風にやおはすべき。この処にては聞もおよばぬわざなりや。されば夜のまに花はのこりなく散さぶらひし」と申。煬帝これを聞て逆鱗甚しく「天帝地祇も朕がかかる企をしろしめさぬことはあらじを、ことはりなく朕が一日の遊覧を妨給ふべきやうなし。さては花神こそにくけり、天下に唯一木の名花なりと、わが身を思ひあがりて、万乗の天子をあざむき風神雨師をかたらひて、朕に一目見えぬやうにわざとしなしたるぞ、いといとにくきしわざなり。大逆とやいはむ、無道とやせむ。いで、ものみせん。すは、ものども、この木うちきれ」といふ。ほどこそあれ、数百人のつはものども、斧よ鉞よとひしめきて、みかかへもあらん大木を、しばしがほどにきり倒し、枝葉までをあつめて火をかけて灰となしける。これより後、「瓊花」てふものは世中に絶はてけるとなむ。いかなる花なりとはものにもくはしくは見えざりければ力なし。ある時、ふるき巻物を見たりしに、道士の、「瓊花」を手折て、手に持たるかたあり。其花も葉もまさしくここもとの「八重桜」なりけり。この花なき国にはかかる花を絵にかきたるもあやしく「瓊」てふ名もうちおきがたしや。また、江都はかしこの南国にて東のはてなり。わが国の西のはてとは波路ほど遠からず、気候も同じければ、草木のうつりわたるも、たがひにすくなからず。されば、いづれより移りしはしらねど、江都の「瓊花」と奈良の「八重桜」とは、またくおなじたねなりと思ひなりぬ。詩賦などうちつけに桜を「瓊花」といひたらんも罪なかるべしや。

【校勘】○ためらふ…懐徳堂本「ためろふ」。

青鳥　青雀　ウグヒス　一〔口絵〕

「青鳥氏司啓」と『春秋伝』に見えたり。げに立春より鳴鳥なれば、司啓の官に名づけたるもむべなりや。東方朔が「西王母の使なり」といへるもこの青鳥なり。唐詩には西王母のことによりては「青雀」ともいへり。世俗に用ひなれたることにはあれど、詩賦にはこれに「鶯」の字を用ゆるはひがごとにこそ。

黄鳥　鶯　黄鸝　倉庚　カウライウグヒス　　二〔口絵〕

この国になき鳥なれば、図に及ばぬことなれど、ふるくよりよこなまり来りて、世にまぎること多ければなむ。

海棠　甘棠　沙棠　　二〔口絵〕

これも図に及ばぬものなれど、世にあらぬものを「海棠」とよぶ故になむ。

いにしへは「棠」とのみいひしを、又「甘棠」「沙棠」とわかちてよぶ。然れば「海棠」も同じく「棠」の別種ならん。「海」の字を添たるはいかなるやしらねど、皆古の「棠」なりとはしらるる。

棣　常棣　唐棣　ハネズ　　三

『万葉』に唐棣花とかきて「ハネズ」とよみたれば、たしかならねども、此を和名とすべきにや。「はねず色のあか裳の姿」とつづけたれば、「けし」にはあらじ。

この木に和名なし。近き世にわたり来にけらし。世に「カイダウ」とよぶはあやまりて「海棠」の文字を此にあてたる故なるべし。これはひがごとなり。「林檎」「来禽奈」「マルメロクハリン」などみな「棣」の別種と見えたり。これら皆郷俗のよび来れるにて、木の本名にあらず。また、「常棣」「唐棣」といふも其わかれはあるべけれど、それまではしらず。

「リンゴ」といふ、「林檎」の転音なるべし。「棣」の和名とはなしがたしや。かかることをわきまへしれる人、「棣」は「ザイフリ」なりといへり。おろかなる心にて、此をあたらずと思ふことは、古詩に「何彼穠矣、唐棣之華」と見えたり。すぐれて、穠盛華麗の花ならでは此にかなはず。またいふ、「威儀棣々、不可選分」。まことに美麗なればこそ、「棣」をかりて美人の姿をかたどりけれ。「ザイフリ」にはかかるひかりはあらじものを。又いふ、「常棣之華、偏其反而」。花の茎長く梨樺のごとしとみゆ。「常棣之華、鄂不韡々」ともいへり。世にいふ「カイダウ」なれば、みなよくかなへり。

薇　カガミグサ　ワノサンキライ　　三

おほく荒野山坂にあり。墳丘の景物にぞ。蔓草にはあらで、よくひろがりたふれて蔓草のごとし。刺あり。

蔦　寄生草　ツタ　ヤドリギ　　四

蘿薜の類にてよく物にはひつたふ故に「ツタ」といふなるべし。秋は葉紅にそめて落るなり。またさらぬもあり。*それは「キヅタ」といふ。すなはち「蘿」なり。

「蔦」は地上におひ出るものなれど、樹木によぢのぼりては、ささざき足をおろし、樹の膚にふみいれて、そこにてまた根をおろせば、もとの根はきりそこなはれても、この草はかれず。故に「寄生」の名あるなり。人の、家をうしなひて、外の家にすみて、人にかかりて世をすごすにたとへ

たるならん。又たねを樹の皮の内にのこしてそれよりおひ出るもあるべし。

【校勘】○もあり…手稿本はもう一つ「もあり」あり。

女蘿　松蘿　寄生草　サガリゴケ　　四〔口絵〕

これ尤寄生の物なり。ふるき図画をみるに、松にはかならずこの草かかれり。右の二物みな寄生の名あり。詩賦に「寄生草」といふは二物をおしこめていひけらし。なを女蘿を主とすべし。和歌には「やどり木の紅葉」てふことありて、蔦を主とすべし。この外に「兎糸」てふものもあれど寄生の名なし。

およそ寄生に昔より二流あり。其ひとつは草本なり。「蔦」「女蘿」是なり。今ひとつは木本なり。桑の上におひたるを「桑寄生」とて薬に入なり。ちいさき物なれど木類なり。から橘に似て葉厚し。実もから橘のごとし。外の木にもおひ出べけれと、それは「桑寄生」の名なし。この一流は「寄生木」と名づけてよろしかるべきにや。又桑の疣をとりて「桑寄生」と名づくるもあり。ひがごとなめり。「メシマコブ」といふが本名なり。肥前の女島より出る。さて木本は薬の外には用なし。詩歌の家にはひんなしや。

古詩に「蔦与女蘿、施于松上」といへり。蔓延の物ならでは「施」とはいふまじ。これにてよくわかつべし。ふるき詩伝に「蔦、寄生也」と見えたり。これ草本にてよくあたれり。さるを後の人また此をときわかたんとて木本もてかきみだしけり。もろもろのあやまちみなかかる類なりけり。

梧桐　椅　アホギリ　アホニヨロリ　　五

二字にて一木の名なり。およそ物もて物をささへしとどむるを「支吾」といふ。凡もて人の体を支吾する故、凡を名づけて「梧」といふ。「梧」につくりてよろしき「桐」なれば、其木を「梧桐」といふなり。もと「桐」の種類なれば、「梧」の字をそへてわかつなめり。「梧桐」をわかちて二木とするはあしし。詩中に「碧梧」などいへるは略言なり。ここの論にはあづからず。

杻　カシ　　五

木理屈曲して裂がたし。故に弩幹とす。又罪人の械とす。其械を「カシ」とも「カセ」ともよぶなり。木の名より出て械の名となれるか、械の名より転じて木の名となりしかいづれならん。

この木類多し。木理よく通りたるもあり。まことの「杻」にあらず。「木」辺の「堅」はなき文字なり。

垣衣　青苔　苔衣　石衣　コケ　コケゴロモ　　六〔口絵〕

これは常に庭にも石にもおふるこけなり。それが垣の上におひのぼりて、きぬをきたるやうなるを「垣衣」といふなりけり。ふる人の詩に書たるはみなこれなり。陶弘景よりこのかた、ひとつ葉のやうなる草を「垣衣」と名づけて薬にいれたり。それよりしてこの名はみだれたり。

陶弘景より後の詩にも「苔衣随溜転」は梁元帝なり。「雨墻陰湿長苔衣」は楊億なり。「雨多青合是垣衣」は陸亀蒙なり。地にあれば「苔衣」とい

ふ。垣にあれば「垣衣」といふ。其義一なり。石にあれば「石衣」といふも。

蕣 槿同　アサガホ　六【口絵】

「蕣」「槿」「牽牛」、みな「アサガホ」の名あり。朝に花を開て暮に萎み落ることのおなじければにや。

「蕣」は、今いふ「木芙蓉」なり。「地蓮」ともいふ。光彩は「槿」にまされり。『詩』に美人をほめて、「顔如蕣」といへる「槿」にはあらざるべし。「槿」は今の「ムクゲ」なり。ふるくより歌によめるは「槿」と「蕣」なりけり。「牽牛」もよみたれど、近き世よりのことにぞ。「槿」にもいとうるはしき花なるも今はあれど、近き世のことにて、昔はなかりしとぞ聞。

蠑螈　ヰモリ
蜥蜴　トカゲ
蝘蜓　ヤモリ　守宮　七【口絵】

この三物まぎれやすし。図にて考ふべし。

花かつみ

世俗に「ヲカカキツバタ」といふ草あり。郷名にや。場師のみだりに名をつけたるにてもあるべし。これ「花かつみ」なりとぞ。「あさかの沼の」とよめり。五月あやめのやうに屋にふくともいへり。この草なりとぞ。

「バレン」とはこの草の別名なるべし。軍器に「バレン」の指物てふあり。まさしくこの草の形なり。

【以下、「〜おなし」まで朱筆】

或云、世に「花菖蒲」といふ草あり。是ぞ「浅香沼」なるべき。この花、紫あり、白あり。およそは「おかかきつば」と一類にて、葉細く長くよく真の菖蒲に似たり。この説まさるべし。

この紫に数品あり。「カキツバタ」によく似たる紫あり。文彩もおなじ。

榛　ササグリ　シバグリ　八【口絵】

「榛似栗而小」とは古よりの定説なり。陸疏に「莘栗叢生、大如杼子。中仁皮子形色与栗無異」といへり。諸説の中にて、此よくかなへり。今、荒野山坂沙岸などに荊棘と雑はりおふるものなり。故に地あれて道路のふさがるを「榛蕪」といふ。「荊榛」ともいふ。

「ササグリ」とは「小栗」のこころなり。これにまた大小あり。やや大なるは食品となる故に、古書つねに「榛」「栗」をならべたり。いたりてちいさきは、食ふにもたらず。土地の厚薄によりてなるべし。べちの物にはあらず。およそ「榛」の味は「栗」にまされり。

べちに「ハシバミ」といふ木あり。葉に鏃あり。実は「柮」のごとし。刺殻なし。此は「栭」の字あたるべし。「栗」には似もつかぬ物なり。それに「榛」の字をあてたるは大なるあやまりなれど、そのあやまりももろこしよりとくわたり来りし。

莱　シバ　九

荒地にやがてもえ出るものなれば、すておきたる田地を「莱田」といふ。「闢草莱」てふ語もあり。この草一たびもえ出れば、日々にひろがり漸々こなたに来る草なれば、「来草」てふ心にて「莱」とは名付けらし。

「シバ」に「芝」の字をあてたるはひがごとなり。「莱」を「よもぎ」とよむもあらぬことなり。みなふるき謬にぞ。

蕪　九

荒地、廃宅、陂塘にいちはやくもえ出る草なり。この国にては名もなく、人はただ草とのみよびていやしむ。

蔓菁の類に「蕪菁」あり。即「カブラ」なり。「カブラ」の葉よく「蕪」に似たればとてなん、「蕪菁」の名をとりけらし。

おほくもえつらなる故、「平蕪」の称あり。「荒蕪」ともいふ。よく道をふさぐ故、「榛蕪」の称あり。「莱蕪」ともいふ。

近俗、「蕪」の一字を「カブラ」とよむは、「蕪菁」をはぶきていひならはしけらし。されど心ゆかぬわざなりや。

鶺　天鶺　天鶺　雲雀　告天子　ヒバリ　十

「天鶺」は『爾雅』に出たり。然るにこれを「天籟」といはばさらに趣あらんを、「鶺」は誤文にやあるらん。

「雲雀」もよき名なり。崔禹錫『食経』に見えたれば、唐の名なり。詩賦などに見えざれば、やまとことなりと思ふはひがごとにぞ。

鸚鵡螺　フメツ　十一

殻の鸚鵡の鳥に似たればぞ、かくは名づけけらし。世に「不滅貝」とよぶは、いかなる心にや。

われから　貝　貝光　コヤスガイ　十一

もろこしのむかし、今の金銭のやうに亀貝を用ひたり。其貝これなり。後には惣名となれども、もとは一物の名なり。

「ワレカラ」とは「破殻」のこころならん。外の物の殻のわれたるやうにみゆればなん、この名をとりけらし。これを和歌にむすびて「われからなく」とつづけたり。海中の物なれば藻にすむ虫といひかけたるのみぞ。後の人、かならず藻の中にて鳴虫をとらへてこの歌をとかんとするは、いとかたはらいたしや。「ワレカラ」は貝の名なるをしろしめさぬ故にこそ。

藻　モ　十一

其類あまたあるが中に、今やうのきぬの紋にすりたる「からくさ」てふものこそ、まことの「藻」なりけれ。もとは唐織物よりうつしたれば「からくさ」とよぶなりけり。また其本をたづぬれば、衮服十二章の内の藻なり。今、河にも池にもおほくあり。もろこしにのみこの草あるにはあらず。賤が屋のよるの物にさへ、この紋はあるなり。いとかたじけなきわざなりや。

鴟　ヌエ　ヨタカ
梟　鴞同　フクロウ
鵂鶹　ミミヅク

この三物いたりてまぎれやすし。諸説あやまりおほし。故に今かくさだめて図をたつるも、おこがましや。

十二〔口絵〕

藟　藟同　藤　フヂ

今の紫花・白花の「藤」、すなはち「藟」なり。此外にもなを諸品あるべし。いにしへ「藤」の字なし。篆文もあらず。『詩』におほく「葛藟」を詠ぜり。外の物と思ふはよろしからず。『本草』の説わろし。漢の末の郭璞いへらく「江東人呼藟為藤。似葛而麁大」。この言まことにあたれり。しかれば、「藤」とは呉孫権の時よりぞいひはじめぬらん。

十三〔口絵〕

「葛」「藟」同類にて、「葛」は総名ともなれり。故に「葛」を「ふぢ」ともよめり。今にても河内国葛井寺を「ふぢ井寺」とよぶなり。姓氏および郡邑の名もかかることおほし。然れば、「藤」「葛」もて織たる布はいづれとわかちいふにおよばず、みな「ふぢ布」なるべし。

「褐、毛布也」とは中古より定まりたることばなり。今まで異説なし。然るに世中に「褐」をかりてもろもろ茶色なるものを「褐色」といふ。また「茶褐色」ともいへり。かの「毛布」は獣毛もて織たる布、今いふ「ケドロメン」なり。織たる初には茶色なし。鼠色また赤らびたる色は皆染色なり。是より疑はおこれるなり。「藤」「葛」もて織たる布は細なるを「絺」といふ。其次を「綌」といふ。あらきを「藤布」といふ。其品に上下はあれども織出たる時はみな茶褐色なり。「葛」の布なれば、其冠の草をさりてかたはらに衣をすえたらん文字はよき製なるべし。其字音の「カツ」をやはらげて「カチ」とよびたるもあしからず。故に、「褐」は「藤」「葛」の布に疑ひなし。「毛布」にはあらず。「褐」は至て賤き者の服なり。「藤」「葛」を織たるままにて、きれはなり。「褐寛博」是なり。「衣褐懐玉」の語もあり。和歌にも「山人のふぢ衣」とよめり。

布の染色に「カチ」あり。これ褐色なり。茶のすこし黒みたる色なりし。今やうは黒に過たり。

喪服の「ふぢ衣」といふもの、もとは上が上までかの山人の「ふぢ衣」にてありけらし。後の世にぞ、麻布を薄墨にて染ることにぞなりけらし。かかる疑ひを腹にたたみおきてほどもなく消うせむ露の身のはたなにかせん。かきつけおきなば、よく物をわきまへたらん人のかうがへくさにもやと思ふも、いとおこがましや。およそ此巻にかきつらねたる大かたは、しかなり。さきざきにはいはず。もし『本草』てふ巻物を斧にふりてきりただされんの心あらん人は、初よりみそなはすまじきことにこそ。

【校勘】○え…手稿本「ゑ」。○こそ…懐徳堂本「ぞ」。

穀　楮　構　コウゾ　ユフ　カヂ

十三〔口絵〕

これは今の世に紙にすく木なり。いにしへはこの木皮をとりて布に織たり。此を「白にぎて」といふは、麻布を「青にぎて」といふに対してなん。ならびに神に奉る時の名なり。常に人の服にするものゆへ、神にも奉るな

り。神に奉るとてべちにつくるにはあらず。これに「木綿」の文字をあてたるは昔よりの謬なめり。「木綿」は「白氈」*とて外国にありし物なり。もろこしにもこの種おそくわたりぬ。ましてわが国にて「白氈」は人の国にて木の皮もて織たる物にて、其名を「木綿」といふと聞ひがみて、やがてわが国の「穀布」に「木綿」の名をあてたるなめり。このまどひは後までもとけがたしや。もし、この「木綿」の二字をすてて、唯「ゆふ」とのみいひたらば、さはることなかるべし。

神のぬさはらひの「しで」「しめ縄」「たすき」、みなおなじ物なり。穀皮の糸を織たるとさらぬとのみ。「穀」はことに物をゆひくくるに便あり。故に「ゆふ」といふなり。「ゆふ」は「結束」の義なり。

「穀皮」のことは古書に多く出たり。「禹貢」に「東夷卉服」といへるもこのたぐひなるべし。人のよくしりたることなれど、またしらぬもあるべしやとて、ひとつふたつ左にあぐ。

『古語拾遺』曰「令白神種麻以為青和幣。令天日鷲神以津咋見神穀木種殖之以作白和幣。」註云「是木綿也。」

又曰「令天富命率日鷲命之孫求肥壌地、遣阿波国殖穀麻種、其裔今在彼国、当大嘗之年、貢木綿麻布。」

上古は「穀」「麻」の二種のみを服とせり。故に神に奉るにも唯この二種なりけり。「穀布」を「白にぎて」といふ。「麻布」を「青にぎて」といふ。「にぎて」並びに「和幣」とかきたり。其後、蚕飼いで来にければ、この帛をも神に奉るなり。きぬを「にぎたえ」といふ。麻を「あらたえ」といふ。この頃よりや、「穀布」は幣に用ひぬにぞ。いにしへの「にぎて」と後の「にぎたえ」とは其物おなじからず。唯其言のよく似たるより、人の惑の穿とはなれりける。そもそも古は青・白ともに「和」の字を用ゆ。

「穀」を冬服とし、「麻」を夏服とす。あまり精粗の級なきものなれば、並びに「和」といへり。「和」は嘉名なり。稲を「嘉蔬」といふにおなじ。きぬ出来しより、麻布とは大に級ありければ、「和」をきぬのかたにとりさだめて、さて「和」に対して麻布を「荒」といふ。「荒」は粗なり。「和」は精なり。時々のいひごとにはかくもあるべし。

今にも穀布は土佐国にて織なり。四国の内はこれを用ゆ。名を「太布」といふ。外の国にてはしらずぞあるらし。

「ゆふしで」は、穀の皮を裂て竹の末にゆひつけて塵を払ふ物なり。其形は払子に似たり。世俗に用る「采幣」にも似たり。もとは常にも用る物なるべし。神社にては、みやつこども広まへに出んとてはまづこの「ゆふしで」をとりてわが身を払ふ。垢穢を去て身をきよ*むる心なるべし。今、神の御まへに杖の末に白紙をきりかけて「幣」とよぶ物あり。これは昔の「和幣」の変形なり。それにまた「ゆふしで」をあつらへつけて、みやつこの身を清むる姿は残りたれど、神に奉る物はなし。唯ねぎごとを申時の手まさぐりになむ。世中のうつりかはる事はみなかかるたぐひなり。およそ今の物を本として古へをかたるは大なるひがごとにこそ。*今の紙は上古よりありなどいふ人も世にはありとかや。われらが凡智のしらぬことにぞ。

ゆふしめ縄は穀の皮を縄になひて引はへたるのみぞ、むかしの姿なりける。処々の物をむすびつけたる物にはあらずかし。

「ゆふだすき」はいま竈屋につかへまつる奴婢の肩にかくる物とその形はかはることなし。穀皮の糸を縄になひて肩にかけ、袖を引あつむる物なり。神供奉る時に用ゆ。斎祓にかかることなし。今は白氈をたちて細き帯のごとく輪にまはして領にかけて祓をもなし、祢ぎごとをもする。これを名づけて「ゆだすき」といふ。火宅僧の輪袈裟に似たり。古へに聞も及ばぬ物にぞ。いかなるわざにやあらん、これらをも神秘といふなればせむかたなし。あやしの世や。

世に「梶」といふ木あり。七夕の供に用ゆ。きぬの紋にもするなり。「梶」はもろこしになき文字なり。「カヂ」とよむ、すなはち「穀木」なりとぞ。地名の「梶原」は「構原」のあやまりにてもやあらん。

「栲」は無文字なり。古歌にこれを「タク」とよむ。けだし是も「楮」の訛文なるべし。「栲縄」とは楮皮をさきてつくりたる縄なるべし。

古歌に「あらたえの藤」とおほくよみつづけたり。「あらたえ」は麻を本とすれ、藤葛の服も「あらたえ」の名あり。然れば楮服も「あらたえ」のうちなるべし。

【校勘】○氈…原文では左を「畳」に作る。以下同じ。○きよ…懐徳堂本「清」。○こそ…懐徳堂本「ぞ」。○「栲」は無文字なり…以下、手稿本は「花かつみ重複削るべし…」を隠す貼り紙の上に書かれている。後に書き足されたものなのであろう。

すみれ　ゲンゲ　十四

「スミレ」に二種あり。おなじく紫とはいへれど、花の色あかみがちなるは、世に「ゲンゲ」といふ。古へ「スミレ」とのみいひしは大かたは「ゲンゲ」なりけり。「春の野にすみれつみに」などとおほくよめり。この花おほかる処は紫の雲にたとへたり。王城の西北に「紫野」あり。この花おほかりしより名をとりたるならん。

つぼすみれ　十五

これは、花のいろ、青みがちなり。花の下に腕あり。わらはべのすまゐとらする物なり。これも歌によめり。

著　ハギ　メド　十六

昔より「ハギ」に「萩」の字を用ゆ。文字の形は似合たるやうなれど、ひがごとにこそ。もろこしに「萩」の字なきにしもあらねど、「楸」におなじく木の名なりけり。この草はいづこにも野山におほきものなれど、かの国にてはこれをめづることなし。唯、古詩に「浸彼苞著」と詠じたり。すなはち「ハギ」なりけり。あつまりおほるもの故に「苞著」といへり。うらかたの「メド」てふ物も是なめり。苞著なれば、一むらうちきりても五十茎あるべし。ふときほそき心のままにひとしかるべし。うらかたの用は数をかぞふるのみ。草の性によらねど、目の前にゐやすき草をとるべし。あながちにゐがたきものをかなたこなたたづねむやうなし。後の人はいづくの山のおく、浜のくまにまことの「メドハギ」なんあるとあらそひいふめり。いとかたはらいたしや。

『古今集』の「めどにけづり花」てふこともあらそひの種にや。花瓶に花をさすに其かたぶきたふれぬやうにとてハギを一束つかねて、かづらにてゆひ、まづ瓶の腹にいれおきて花を其間にさす、是を「メド」といふなり。茎の間目の通りてすきまあれば「メド」といふなり。然れば、「うらかた」の外の名にぞありける。今の世には藁をつかねて瓶にいるる、其名を「コミ」といふ。便利大におとれり。昔やんごとなきあたりに仏名てふ斎会ある時はかならず「剪綵花」を仏前に奉ることなり。ことおはりて後は、其花をメドともにおろして、人のもてあそび物とす。『古今集』なる

は是なりけり。「けづり花」即「剪綵花」なり。「天竺花」「胡枝花」などの異名はあたれるやいなやしらねども、皆後の世の郷名なれば、とまれかくまれ。

【校勘】○れ…懐徳堂本は、もう一つ「れ」あり。○ねど…懐徳堂本は「ぬと」に見える。○に…手稿本なし。

蟋蟀　キリギリス　十六

「コウロギ」はいづかたにもおほし。「キリギリス」にあらず。また「ハタハタ」をとらへて「キリギリス」といふもひがごとなめり。大和国には今もあり。「ヤマコウロギ」といふ。豊後国にては「キナヅツ」といふ。よくたたかふ。

このむし「コウロギ」より形大にて健なり。声高くしてよくすめり。

芄蘭　ユウガホ　十七

およそ瓠匏の類、大小によらず、白き花さくをおしなべて「夕顔」とよびて歌にもよむは近き世のことなり。いづれも夕がけて咲物なればさるべきことと思はるれど、はた、しからずかし。なべていづかたにもあるべきものにては、『源氏』夕顔の巻のことは通ぜず。土佐の絵、後藤の彫物を見よ。皆いにしへの「夕顔」にて、「瓠匏」にはあらず。

古詩に「芄蘭」の実を「觿韘」にたとへたる、即、「夕がほ」なりけり。実の末のとがりたるよりなりさがりたる形、「佩觿」によく似たり。また、みつよつならびてなりさがりたる、「佩韘」によくかなへり。

この実食ふべし。故に世にも「丁子」「茄子」ともよぶ。

旧解に「芄蘭」を「蘿摩」なりといふ。されど、「蘿摩」の実をふたつにわれば舟のごとし。かつて觿韘の形を見ず。かくては『詩』の比興はあだ物にぞ。いと久しき謬なめり。

蛇　ハエ　クチナハ　十八

古書に「さばえなすあらぶる神」といふことばあり。五月は蛇のおほく出て諸虫を食ふことの盛なれば、「五月蛇」といひたるなり。縄を引はえたる形なれば、蛇は「はえ」の名あるべし。今、かの記録ども、皆、「五月蝿」と書たる故、人、皆、蚊蝿の蝿とおもへり。さて、解説みなみながへり。「蝿」は「蛇」の譌文なるべし。或は「縄」に似たる虫なりとて、「糸」をさりて「虫」をすえて蚊蝿には心づかざりしにや。又、古記に素戔烏尊の「天叢雲剱」の異名に、「天蝿斬剱」あり。かの八岐蛇を蚊蝿といふべきやうなし。蝿また剱もて斬べき物にあらず。

蝮　ハミ　ヘビ　マムシ　十八

「ハミ」も「ヘビ」も「反鼻」の転音なるべし。されど、今は「ヘビ」はこの類の総名となれり。

たけ短かく、尾の末ふとく、刀にてうちきりたらんやうなるこそ、まことの蝮にてぞ*ありける。今の世はこのゐらびなき故、薬に効なし。

【校勘】○ぞ…懐徳堂本なし。

水蛞　河童　カハタラウ　カハツハ　十九〔口絵〕

いづこにもあるものなれど、ことの外、足はやくて人にとらるることまれなり。「河辺に児を鼈にとられし」といふは大かたはこの物なりけり。九州には殊におほし。

【校勘】○かた…懐徳堂本「形」。

【参考】これに対応する『左九羅帖』の画は、懐徳堂本と中之島本で違う。後者は以下の「河童図」による。

〔中之島本に以下の貼り紙あり（手稿本、懐徳堂本なし）〕

享和辛酉水戸浦所捕河童図

当六月朔日、水戸浦より上げ*候河童、丈三尺五寸余、重サ拾貳貫目有之候。殊之外、形より重く御座候。海中にて赤子の鳴声夥敷いたし候間、猟師の船にて乗廻り候得ば、海の底にて御座候故、網を下し*候へば、いろいろの声仕候。夫よりさし網を引廻り*候へば、網の内へ拾四五疋入申候、おどり出、おどり出、逃申候。船頭ども棒かひ杯にて打候へば、ねばり付、一向にかひ杯きき不申候。その内、壱疋、船の中へ飛込候故、とま杯押かけ、其上よりたたき打殺し申候。其節までやはり赤子の鳴声致申候。河童の鳴声は赤子の鳴声同様に御座候。打殺*候節、屁をこき申候。誠に堪がたきにほひにて船頭杯後に煩ひ申候。打候棒かひ杯青くさき匂ひいまだ去り*不申候。尻の穴三つ有之候。惣体骨なき様に見得*、屁の音はいたさず、すっすっと計申候。打候得*ば、首は胴の中へ八分程入申候。胸かた張*出し脊むしの如くに御座候。死し候*。首引込不申候。当地にて度々捕へ候*。此度上り候程、大きなる重きは只今迄上り不申候。珍敷候間申進候。　巳上

【校勘】＊『日本随筆大成』『大田南畝全集』との異同を示す。○上げ…「上り」。○下し…「下し申」。○引廻り…「引廻し」。○打殺…「打殺し」。○り…なし。○見得…「相見へ申候」。○得…「へ」。○張…「強」に見えるが、『日本随筆大成』『大田南畝全集』により改める。○死し候…「死候て」。○捕へ候…「候へ共」。

蒿　ヨモギ　二十
蕭　ヨモギ

おなじく「ヨモギ」とよべども、其葉細く毛のごときは「蒿」なり。その葉、菊に似たるは「蕭」なり。ならびに種類多し。この二物、形状分明にしてまぎるることなきを、臭気のよからぬを似たる処となしてや、昔よりたとへにも「蕭」「蒿」をつらねあげたり。然るに『本草』諸書に出たる異名には、蕭類に「蒿」の名あり。蒿類に「蕭」の名あり。混乱はなはだし。今にてはいかがすべき。唯この二物を心によくわきまへて異名に欺かれぬぞよかるべき。

瓠　フクベ　廿一
匏　フクベ　壺　瓢　葫蘆

大小によらず、甘きは「瓠」なり。食ふべし。故に文、「瓜」に従ふ。

苦きは「匏」なり。食ふべからず。物をいるる器とするのみ。故に文、「包」に従ふ。この義をよくわかちなば、外の諸品みな従ひて二つにわかるべし。

【校勘】○器、品…懐徳堂本は両者とも同じ崩し字（器？）。

瓜　ウリ　ナウリ　廿二

「瓜」はこの類の総名なれども、もとは一物の名なり。むかし煮果、醃菹、皆この一物なりし。後の世に、「甜瓜」「越瓜」「冬瓜」の類あまたいで来て、菓食は「甜」、煮食は「冬」、醃菹は「越」とさだまりぬるより、「ナウリ」は食ふ人まれなり。七夕乞巧奠に「ナウリ」を供する例もあれど、味よからずとて、やがてすてやるべし。かたいなかの「甜」「越」なき里などは、「ナウリ」をうゑて煮菓にも醃菹にも、唯この一物を用ること昔のごとし。「ナウリ」とは「菜瓜」てふこころなるべし。外の菜ならぬ「甜瓜」「西瓜」等に対して名づけらし。この物、煮食は「冬」に及ばず、菓食は「甜」に及ばず、醃菹は「越」に及ばず。この三不及はあれども、一物にて諸食をかねそなふるは、其功大に過たりといふべし。民食の益おほし。もろこしも、しかぞありける。『斉民要術』に「瓜」とのみいひしは、みな「ナウリ」なりけり。たまたまには「漢瓜」ともいひし。これは「越瓜」「胡瓜」に対していひ出たるなめり。ふるき名にはあらず。後の世の人は「甜瓜」をまことの瓜なりとおぼひて、豳風「七月」よりはじめてもろもろふるき文に疑をおこして人の口腹も古今のかはりありなどいふめり。井の内の蛙のこころばえなるべし。

【校勘】○づ…懐徳堂本「付」。

なき　葱　ヒトモジ　ネギ　ネブカ　廿三

「キ」はこの類の総名なり。この物ことに菜食によろしき「キ」なりとてなん、「ナギ」とは名づけけらし。

根の白く肥たるを賞して「ネギ」といふならん。又、しろき根をふかくおろしたるを賞して「ネブカ」といふならん。皆俗名なり。

こなき　胡葱　アサツキ　二十三ウラ

「小葱」のこころなるべし。形いとちいさくて、うゑわたしたるも根浅き故にや、「アサツキ」の名あり。「浅葱」のこころなるべし。皆俗名なり。また、「茖葱」あり。俗名「ギャウジャニンニク」、また「ラッキャウ」とよぶ。よく似たる物なり。やや根の肥たるのみぞ、これをも「コナギ」とよびけるにや。

ある人いはく、この二名は「薤」なり。「茖葱」にあらず。

これらは、いとまぎれたることのみにて、さだめてはいひがたし。

荇菜　蓴　茆　ジュンサイ　廿四

いにしへの「荇菜」は今の「蓴菜」なり。名に古今あれど、其実は一なり。「荇」といひ、「蓴」といふ、この草の名なり。菜食によろしきものゆへ、「菜」の字をそへてよぶなめり。古説には「荇」を「接余」なりとい

へり。「接余」は「アサザ」といふ草なり。「蓴」に似て葉に缺あり。滑なし。食ふべくもあらずかし。菜の名はあるまじきことにこそ。

衆菜に秀たる「蓴」なればにや、関雎の詩、これをかりて淑女をしたひもとむる心をのべたり。食ふべきやいかがと思ふほどの「接余」を、いかでしたひもとめむやは。『爾雅』などふるき文なれど、したがひがたきことおほし。「荇」のみにかぎらず。

牡蠣　フタミガキ　ヲキガキ　廿五

食品の蠣、二種あり。大なるを「牡蠣」といふ。肉の形、ハマグリの肉に似たり。味はおとれり。この殻、薬用に入。

雌蠣　カキ　廿五

ちいさきを「カキ」とのみいふ。肉の形、ちいさき烏賊に似たり。味厚し。いづかたにても賞玩する物なり。これは「雌蠣」と名づくべし。すでに「牡蠣」の名あれば、必、「雌蠣」あるべし。この物こそ、まことによくかなひけれとてなん。あまねく文をかうがへみるに、いかにぞや、あらず。この「雌蠣」の名はこたびはじめてふかうどのたてまつるなりけり。

この雌蠣は五穀をうゆるがごとく、人の手をそえておほしたてたる物なり。海中には岩につき、かさなりあひたる蠣あり。これ雌蠣の自然生なり。肉ややさらにちゐさくして味はいとよし。されど、其海ちかき所ならでは、いと得がたし。故にここにはいはず。

珠母　廿六

これ真珠をうむ貝なり。ことごとしく図に出すべきことにしもあらねど、はたしらでまどふ人もすくなからねば、わが家にたくはえたる三種をかきのせたるなり。大ふたつはもろこしのなり。小ひとつはわが国のなり。珠はもと殻の中にはらみて、ふとりまろくなりて後、殻をはなれて肉に入ものと見えたり。

【校勘】○ふとり…懐徳堂本「ふとく」に見える。

やまぶき　欵冬　ツワ　廿七

「ヤマブキ」は「欵冬」の和名なりけり。山野におのづからおひ出て、「フキ」に似て圃菜にあらずとてなむ、「山葵」とは名づけけらし。世俗に「ツワ」とよぶなり。「フキ」と「欵冬」はよく似たる草なれば、『本草』のあやまりもいで来にけり。「欵冬」はいつまでも葉の枯ることなし。冬の寒きにもますますさかゆれば、「冬をよろこぶ草なり」とてなん、「欵冬」とはよびけらし。「フキ」も冬の内よりもえいづれども、其前にひとたび葉の枯るなれば、よろこぶ心はあるべからず。

人里に植たる「欵冬」は冬の内に花咲おはるにぞ、むかしより山吹を春ながめしにたがへりとてなん、かの謬は出くめり。山中におのづからおひ出たる欵冬には春二三月のころ花さくあり。花も葉もすべて色まされり。花の茎に岐あり。今、諸国におほくあり。

昔より歌によめる「ヤマブキ」はみな「欵冬」なりけり。「井手の玉川」

もしかなり。今はあやしの物をうえたりと聞。

今の世の「山吹」てふ草は「棣棠」といふものなりとぞ。花の木の名をふたつあはせてひとつの草の名とせしもあやしけれど、かつこれを「棣棠」にさだめおきて「欵冬」にわかつぞよき。

「棣棠」は「フキ」に似たる処なし。唯、花の黄なるのみぞ、それさへ花の形こよなうかはりたり。人の国よりわたり来たる物にこそ、人里遠き野山におのづからもえいづることなし。いと近き世のものなりと聞。

羅山先生の「長嘯子に答へし文」とて、人の家にあり草木鳥の名までくさぐさいひあらそへるが中に「山吹」あり。「この文字は欵冬よし、酴醾わろし」など、こまかにのべたるに、「棣棠」はよしともあしともかつていひもおよばず。然れば「棣棠」のわたりこしはこの人々より後のことになむ。二百年にはたらずかし。

葵　三茎草　三枝　福草　蕗　フキ　アフヒ　サキクサ　廿八

「葵は百菜の主なり」と『広雅』にいひし。「公儀休抜葵」および「放馬」「衛足」など故事多し。『斉民要術』にも種葵法あり。菜食の料に地を耕しておほく蒔種る事をいへり。

『神農本経』に葵を菜部に載たりしを、『綱目』を作りし人、思ひあやまりて、「葵は菜にあらず、食ふべき物かは」とてなん、けづりすてたり。さて、湿草の部なる「蜀葵」を古の葵なりとおぼひたり。

およそ木の名、かたはしに「木」をそへたる文字あるは其本名にぞ有ける。其文字の上にさらに氏を加へたるは、必、べちの木なり。かりて名をつけたるのみ。其木の本名にあらず。たとへば「楊」とは本名なり。それに氏を加へて「黄楊」「白楊」「垂楊」といへば、べちの木をかりて名をつけたるなめり。本名にはあらず。草の名もまたしかなり。草なる文字にさらに氏を加へたるは、必、本名にあらず。かの「蜀葵」などいふ草は菜にはあらねども、葉の形のすこし似たればとてなむ、「葵」の字をかり氏をそへて名とせしなり。それを本名と心ゑてみだりなるわざのいで来たるなり。唐詩に「松下清斎折露葵」といひしは、露にまみれたる葵をとりて饌にいれたるをいふなり。これをさへに思ひたがへて「露葵」てふ名をたてて一草をかまへたり。それにては「清斎」にかかることなし。何のために葵を折けるにや。後の人といふ者はかかるあさましきものにぞ。其後の人はまた其言にたがはじとうちまもりてさらにまた後の人をまどはすらめ。

賀茂の「あふひかづら」は葛の類にて葉の形のすこし葵に似たればとてなん、「あふひかづら」とよぶなりけり。「葵の心ばえある葛」といふこころなるべし。それを歌におほくよめれば、「あふひ」とのみもいふなり。わが国の人はまことの葵なりとこれをおぼひたり。やまと、もろこし、境ははるかにへだてれど、後の人とだになれば、大かたはおなじこころにうまれいでぬるぞ、あやしきや。

『綱目』をつくりし人ら、「人の口腹にも古今あり」といひしはおのがあやまちをしらで、其咎を口腹にかづけたるなり。いとかたわなりや。

『綱目』に菜部の「葵」は削りたれど、まことは引ぬきて湿草部の「欵冬」にあはせたり。其形状をのべたるに、一人の言は「葵」なり、一人の言は「欵冬」なり。よくあひたるやあらずや。

『和名鈔』に、崔禹錫の『食経』を引て、蕗を「フブキ」とよめり。「フブキ」とは「フキ」の音ののびたるなるべし。『楚辞』にも「芘蕗雑于廡」といへり。然れば「蕗」も俗字にはあらず。

この草おひつらなりたるころは、家の軒端をふきならべたらんやうにな

ん。されば「フキ」とは名づけけらし。その*「フキ」に文字をあてて、「富貴」と書たれば、まことにめでたき草なりと思ふべし。富貴は人の福なり。「福」の音「フク」また「フキ」の義にかよひたれば「福草」ともよびけらし。「福草」を「サキクサ」とよめり。「サキ」は「サチ」なり。これは文義をとりていふ。げにも「さき草のみつばよつば」にはよくかなひぬべし。

冬の半にもえいづるに、ひともとに葉は必、みつあり。初め二葉いでて後、其二葉の間よりまた一葉出る。人、一葉を摘ば、のこり二葉の間よりまた一葉いづる。三葉の数は長くかけず。久しくつむ人なくば、四にも五にもなるべけれど、みつなん、其常なるべし。茎ひとつに葉ひとつなれば、「三茎草」と名づけしもむべしこそ。むかし「三茎草」をたてまつりし人に「三枝部連」の姓を賜はりしもこの草なるべし。茎と枝は、もと、かはりはあれど、あひかよはしていふめり。「一枝の蓮」「一枝の灯」など、から歌の常なり。「神祇令」に三枝祭あり。「義解」に「三枝花もて酒樽をかざる」といへり。冬枯に草木の花のまれなるころなれば、この草の花なるべし。

【行間】又按ずるに四葉いづれば古葉は萎み枯て必三葉となる。然れば、三葉はこの草の性なるべし。「三茎草」の名よくあたれり。

今、姓氏に「三枝」と書て「さいくさ」とよめり。これは「サキクサ」のよこなまりなるべし。むかしはいかがよみけん、しらず。

この草、日にむかひ*ては葉をたれてわが根をおほひかくして日影にあてず、日にしたがひ*てかたぶきめぐる故に「向日」のほまれあり。「衛足」ともいへり。ここにて「アフヒ」と名づけたるは、「逢日」のこころなるべし。さらば、歌によみてずじうたふにも「逢日」のごとよみけらし。今は「青井」のごとよむなり。歌の心にもかなはず。よこなまりにあらずや。

【校勘】○を…手稿本「の」。○ゐ…懐徳堂本「得」。○と…懐徳堂本はこの後に「は」あり。○の…懐徳堂本「れ」。○書…懐徳堂本「かき」。○い…懐徳堂本「ゐ」。○むかひ…懐徳堂本「むかゐ」。○したがひ…懐徳堂本「したがゐ」。

蓬莱山　博山　不二山　富士山　フジ　　廿九

これはわが国の富士山のから名なりけり。むかし周の季のみだれたるころにや、海中をこぎわたるものの見出したるにや、東海の中に「蓬莱」「方丈」「瀛洲」の三神山あり。仙人のすむ山にて不老不死の薬のおひ出るなど、あだしことをいひさわぐ。まことはひとつ山なるをしらで、山のみつかさなりそびえたりとおぼひて「三山」とはいふなりけり。げに遠き海中よりあふぎみるなれば、さは思ふべし。山の姿もふもとにて見るとは大ひにかはるべし。山ふところの青みわたりたるを、「よもぎ」「しば」のおひつらなりたるになぞらへて「蓬莱山」とはよびけらし。左右を「方丈」「瀛洲」と名づけしこころはしりがたし。さてこの三山をから歌にも文にもかき流したるは、わが国にて富士の烟をよみそめしより、はるかに前のことなりける。秦の始皇帝の時、方士にみことのりして、かの薬をもとめさせけるに、年をへて帰りまうで来て、奏してまうさく、「臣ら、かの神山を目がけて舟をこぎよせて嶋にあがれば、うき世の人には見えじとや、この山するすると海の中に沈みてたづぬ*べくもあらず。舟にかへりて沖に漕出れば、もとのごとくみゆ。またゆけば、また沈む。いく度もおなじさまなり。これまたく臣ら戒行のつたなきにこそ」となむ。いつはりおほき方士なれど、またくよしもなきことをつくりいでたるにしもあらず。遠ければ

みゆ、近ければ物にさはりてみえぬといふことはりをさしおきて「海に沈む」といひけんは、いとおかしくこそ。人皇第七代孝霊天皇の御宇にやあたりぬらん。この時に「富士」てふ名はありしやあらずや。漢武帝の時にもかの薬をもとめさせけり。其後、世々のおごれる帝たち、もとめざるはなかりき。唐玄宗の時には楊貴妃のことにつけて「蓬莱仙宮」をそらごちける。また「三島」てふひがごともいでくめり。其外のくさぐさは、波にみだるるもしほ草、かきあつむべくもあらずかし。いでや、かかるめでたき山の御名をかしづきまいらせて、*「蓬莱の嶋」とてむくつけき鬼のすむ海のあなたのさかいなりと、世にいひさはぐこそいと口おしけれ。

もろこしに「博山香炉」とて名高き宝器ありけり。梁昭明太子のいとおしみたまひし物とぞ。これは玉もてつくれり。其かたちは後の世までもうつしつたへたれば、それをみたりしに、すなはち富士山の姿なりけり。みつのみねの間より香の烟のくゆり出るやうにゑりすかしたり。其ひとつの名は「富士山爐」といふ。また「不二山爐」ともいふと物に見えたり。これは、昔のごとおぼろげにはあらで、海中よりよく見さだめてつくりけらし。さればこの山をはるかに名づけて「博山」といひけるにこそ。げにはたばりひろき山なれば、この名もむべなりや。

わが国なる山を目にもみぬ国にてめでさはぎ、さまざま名をたてたるを、ここにては用ひだにせぬは、いとこころうしや。山の恥にもやなりなましを。さらば今よりは「よもぎ山」といひてもよろしかるべし。「よもぎがみね」もあしからじ。「ひろ山」も「ひろね」も「神山」も、いでや、世中の歌人よ、「われより古へをなす」てふことをよく味はひて、まぐさかる賤のことの葉をむげにはらひすてたまふまじくこそ。

【行間朱筆】『万葉集』東歌に「天の原ふじの柴山」と読たれば、蓬莱の名もむかしは知たる人ありしにや。「しば」の本字は「莱」なり。「柴」はあたらず。「しば山」てふもよき名なり。

【校勘】○たづぬ…懐徳堂本「たづね」に見える。○まいらせて…懐徳堂本「まゐらせて」。○み…懐徳堂本「見」。

【参考】履軒手製の博山香炉がある（『懐徳堂センター報』二〇〇五、口絵参照）。

扶桑木　三十

これはいとめづらしき大木なりけり。もろこしより見えしといふは波路はるかに隔たれど、朝日のさしのぼるほど、日輪の中に木の枝のうちなびきて日の見ゆるなりけり。いかなる木とはしるべきやうはなけれども、枝のすがたの桑に似たればとてなん、「扶桑」とは名づけけらし。「扶」とは枝のならびたちてうちなびきたるをいふなり。されば、わが国をも「扶桑」とぞよびたる。文字にも「東」は「木」の中に「日」あり。日ののぼりて空あきらかなるを「杲」といふ。「木」の上に「日」あり。夜いまだあけず、空くらきを「杳」といふ。「木」の下に「日」あり。いづれも扶桑の木によりていふなめり。さらば、昔、黄帝の時、倉頡てふ者の文字をつくりはじめしころより、この木ははやくさかへしげりけらし。天地のひらけはじめし時、やがてふた葉をひらきけるにぞ。およそ古物名物は人のめづるものなるを、かかる古物名物は、世にまたならぶ物はなかるべし。この木のくちたふれたるは、いつのころなりやしる人なし。

日輪のみならず、月輪のうちにも、秋の半に月のいづるを、呉会のあたりよりうちながめば、まさしく東にあたるべし。梢はいよよあざやかならん。これも扶桑なりとはおもひよらず、おりふし桂の花さくころにしあれ

ば、月の中にも桂ありとて、さまざまにあだしごとをとりそへたる、皆ひがごとにぞ。

「景行天皇紀」曰、十八年秋七月辛卯朔甲午、到築後国御木、居高田行宮。時有僵樹、長九百七十丈焉。百僚蹈其樹而往来。時人歌曰「阿佐悉毛能（あさしものみけのさをばし）溜概能佐烏麼志（まへつきみいわたらすもみけのきをばし）魔幣莵耆弥伊和哆羅秀暮溜開能佐烏麼志」。爰天皇問曰「是何樹也」。有一老夫対曰「是樹歴木也。嘗未僵之先、当朝日暉、則隠杵島山。当夕日暉*、覆阿蘇山也」。天皇曰「是樹者神木。*是国宜号御木国也」。

【校勘】以上『日本書紀』に見える（ふりがなは湯城）。○「暉、覆」…原文では両字の間に「亦」あり。○是…原文では「是」の前に「故」あり。○御木国也…原文「也」なし。

右の文にて*おしはかるに、この時、巡幸の為に行宮をつくるとて、つかさ人ら地をゑらびて、この僵木の側にたてたるは、僵木に仍て延道とし修築の労を省きたるならん。「御木」てふ名は行幸ありて後に名づけたまひしを前に出したるにて、よむ人まどひもぞする。かかることは古き文の常なりけり。

【校勘】○右の文にて～古き文の常なり…手稿本では、この部分は「右の文かみしもおちかへりてことのこころたしかならず…（解読不能）…今これを訳して左にいふなり。景行天皇十八年の秋…（以下の朱筆部分）…棹橋とて歌によみける」を貼り紙で隠した上に書かれている。懐徳堂本はそれに続けて、朱筆で以下のようにある。懐徳堂本が竹島簣山による写本である証拠と言えよう。

【朱筆部分】

簣山云、以下数語素属于蛇足。原本刪之、甚可惜矣。今更拾之、読者勿惑。

景行天皇十八年の秋巡幸ましまして筑後国高田の里にいたらせたまうける。この処に大なる僵木あり。みかどおどろきおぼしめして、この処の父老をめしてたづねさせ給ふ。父老答へて奏すらく「この木いまだ倒れざりし時、朝日には木影杵島をさしかくし、夕日には阿蘇山をさしおほひけるとかたり伝ふるとなん。」みかどふかくめでおぼして「この木は神木なり。みだりになぎりそこなひそ」とてなん、御木と名づけ給ふ。すなはち、この処を御木国とさだめ給ひ、やがて、この木をふみてのぼりくだりたれば、これをみけの棹橋とて歌によみける。

【朱筆部分ここまで】

『紀』に「歴木」とかきて「クヌギ」とよめるは、いとおぼつかなしや。この木はまさしく「樟」なるものを、今その根をけづりてみるに「樟」の香あり。天下に大木となる木は樟なりとは南華の文にも見えたり。

今、この木の跡は、筑後国三池の側、高和泉村にあり。「三池」は「御木」の転音なり。このあたりにては、この木を高田の「ヲラビ楠」とよぶ。また、「大楠」ともいふ。ここの田の名を「上高田」「中高田」「下高田」とてあひならびたり。昔の名の残りたるにぞ。このあたりは木の根残て、今に土中をはひわたれり。井をうがち、池を掘*に、この根にさはりてほりゑぬこと多しとぞ。今ある池溝などは、この根おほくさし出たるみゆ。中にも中高田は昔大楠のたてりし処とぞいふ。

「ヲラビ」は「さけぶ」の方言なめり。地上に風ふかぬ時も天つ空には風あるものなり。この枝葉たかく雲霄に入たれば、常に風を受るゆへにぞ、よるひるなく、轟々と声あれば、かくは名づけけらし。この木まことは「樟」なり。「樟」と「楠」はよく似たるものなれ。むかしより「楠」を「クス」

とよめり。すこしたがひたることにはあれど、かつしたがひて「楠」の字を用べし。

むかし、信濃国、その原のふせ屋にては、ははき木*をみるといへり。この「箒木」も「扶桑」なめり。この処、地のたかきのみならず、西にむかひて山々のさはりなく、遠く見とほさるるなるべし。外の処よりは山の端にさはりて見えぬにや。ここにても山ふかくわけいりてたづぬれば見えずとなむ。はるけき道のほどなれど、夕日落かかりて西より扶桑を照せば、木影あま雲にうつろひておほろげにははきのやうになん、ここよりはみゆるにぞありける。あきつむしの尾の北にまがれる*とぢめなれば遠しとてもさしもあらずかし。もろこしよりもみゆる扶桑なれば疑ふべくもあらず。そもそもその木を「扶桑」と名づくることは、景行天皇のむかしより今の三池の民くさまで、年は千とせを過ぬれど、人はひとりもいはざりけり。今かくかうがへさだめつるは、なには江の浪にただよふふかうどてふるせおのこにぞありける。あなおこがましや、かしましや。

【校勘】○掘…懐徳堂本「堀」。○ははき木…懐徳堂本「き」なし。○まがれる…懐徳堂本はこの後に「に」あり。

【参考】扶桑の大木については、履軒に「扶桑匣記」(『弊帚続編』)が、竹山に、和文の「扶桑木説」と漢文の「扶桑考」とがある。また、山片蟠桃『夢の代』巻四「歴代第四」にも同様の内容が見える。

その他、大阪大学図書館懐徳堂文庫には「扶桑木板」(E381/器59/250)がある。「扶桑木板　水哉館遺物」と書かれた五七㎝×二〇㎝の桐箱に黄色い麻布(おそらく)に包まれて保存されている。板は縦五七㎝、横一七㎝、厚さ一㎝で、一角が欠けているが、いずれの面も刃物で裁断されている。縦に三つに割れており、接着剤で付けようとした跡が見える。黒ずんだ色をしており、硬い木質であり、ケヤキであろうかと思われる。板に文字や加工は施されていない。竹山「扶桑木説」に、脇子善から養老二年創建の仏堂の柱を贈られたとあるのはこれか。

【以下、補編】

右の巻にのせやせまし、のせずやあらましと思ひしばかりのことどもを、紙の末のあまりたれば、またかゐつくるなり。蛇の足にもや。

卯花

卯月に咲て、垣ねの雪とうたがはれし花はまことは木本なれど、枝葉やはらかにて、草の姿なり。もし、「うつ木」に対していはば、これを「うつ草」とこそいふべけれ。中古よりこれをも「うつ木」とよみし歌もあれど、それはあやまりなり。今にては従ふまじくこぞ。



うつ木

「うつ木」は、木の中、空虚にて通りたれば、「空木」と名づけけらし。「うつほ木」てふこころなるべし。*うの花の「う」とはやうかはれり。「空木」「卯花」おなじころに花咲て「う」文字あれば、とにかくに聞たがへてまどふ人おほし。また卯月に咲たるしろき花はいづれもこの花なりといふ人もあり。いとかたわなりや。「空木」は梢より枝たれて咲しだるものなり。垣ねにあるべきやうなし。しろくは咲いづれど、やがて赤く色づきて、枝には常に赤白まじりたり。これまた雪と見るべきやうなし。



【校勘】○なる…懐徳堂本もうひとつ「なる」あり。

椿　ツバキ*

昔より「ツバキ」に「椿」の字をあてたるはたがはぬことにぞ。然るに、もろこしの人は『荘子』の「大椿」にたぶらかされて、「椿」は人間の花にあらずと思ひて、外の名をつけたり。大なる謬にぞ。「鯤」はもと小魚の名なるを、それをかりてかへりて大魚の名とす。これは『荘子』の遊戯なるをしらずや。さる故に、目の前なる椿をかりて神仙の木に名づけたり。それをまことと思ひしはいとおろかなりや。

刀剣の鐔は金にてつくるものなれど、山賤猟夫などの山刀はさしもあらずかし。大かたは木もてつくれり。「椿」は木理よくしまりて堅し。鐔につくるにいとよし。さればおほくこれを用ひけらし。これは鐔によき木なりとてなん「ツバキ」とはよびけるなん。

【校勘】○ツバキ：懐徳堂本なし。



山茶　サザンクハ

昔より「ツバキ」に「椿」の字をあてたるはたがはぬことにぞ。然るに、もろこしの人は『荘子』の「大椿」にたぶらかされて、「椿」は人間の花にあらずと思ひて、外の名をつけたり。大なる謬にぞ。「鯤」はもと小魚の名なるを、それをかりてかへりて大魚の名とす。これは『荘子』の遊戯



なるをしらずや。さる故に、目の前なる椿をかりて神仙の木に名づけたり。それをまことと思ひしはいとおろかなりや。

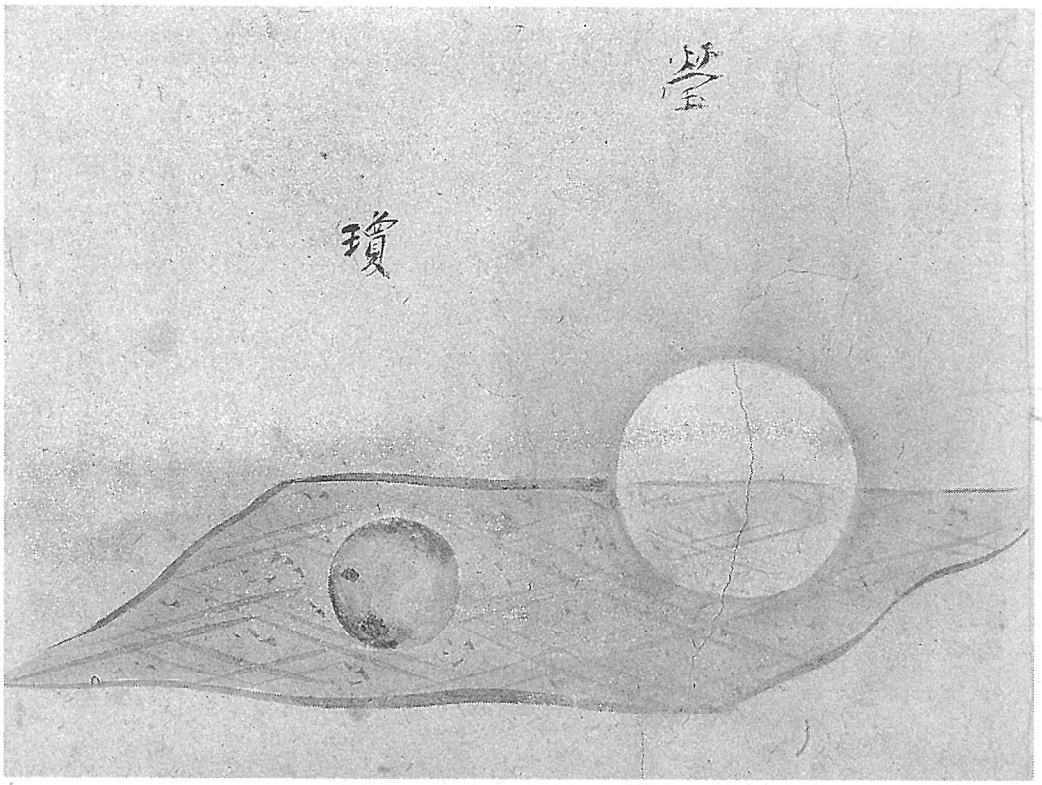
刀剱の鐔は金にてつくるものなれど、山賤猟夫などの山刀はさしもあらずかし。大かたは木もてつくれり。「椿」は木理よくしまりて堅し。鐔につくるにいとよし。さればおほくこれを用ひけらし。これは鐔によき木なりとてなん「ツバキ」とはよびけるなん。

花の形、木の姿、「茶」によく似たれば、この木名あり。「サザン」とは「山茶」の転音なるべし。もろこしにては、かの「椿」の名を『荘子』にとりこめられて、この「山茶」を其代りにたてたり。されど、かれは「茶」に似たる処なきをもて、その謬はあきらかなり。

【校勘】○ツバキ…懐徳堂本なし。

瑩
瓊

「水晶」「馬脳」などいふは、皆、後世のあざ名なりけり。ふるよりありきたる物なれば、おのづから玉にしたがへる文字あるべしとぞ思ふ。古詩に「瑩」あり「瓊」あり。すなはちこのふたつの物の本名なめり。およそ水などの清く、すきとほりたるを「瑩澈」といふは、玉の名をかりてよそへていふにぞ。されば、玉の内によくすきとほりたる物は「水晶」より外にはあらずかし。さてぞ、おぼゆる。また、「瓊」は文采ある玉なりといひ伝ふるなり。これも「馬脳」の外には文采ある玉はなければ、「瓊」はかならず「馬脳」の古名なるべしとぞおもふ。

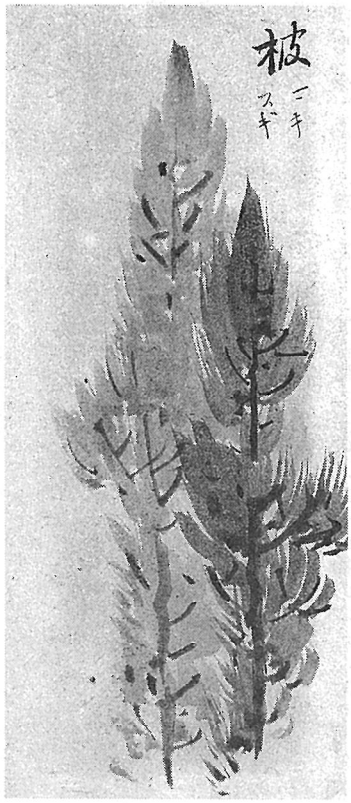


柀　マキ　スギ

いにしへの「柀」は今の「杉」なり。これを「マキ」といひしは、「木もよし、香もよし、木の中の上品なり、これこそ、まことの木なれ」との心なるべし。

今は、「羅漢松」をさして「マキ」とよぶ。古義にあらず。

皮を剥て用ることおほし。故に文、「皮」に従ふ。



榊　サカキ　シキミ

天竺にて香気ある木葉を数々水に漬して香水を製す。これを「アカ」といふ。「榊」は其中のひとつなる。神仏に供するのみならず、人も常に用ゆ。焼香の類なり。ここもとにても榊葉を水に浮めて仏に供することあり。榊の枝を仏前にたて、墓にもたつる、皆「アカ」の遺製なるべし。

むかし、神事に「サカキ」とて用ひたるは、すなはち「榊」なり。香ある木なればなるべし。いつのころよりか神家の人ら仏を憎むあまりにや、「榊」をも用ひず、外の木を取て*「サカキ」と名づけて用ることとなりたり。されど今に伊勢に「サカキ」の神事てふありて「榊」を用るとかや。又、春日、山王なども「サカキ」とて用る、みな「榊」なりと聞。

【校勘】○取…懐徳堂本「とり」。○づけ…懐徳堂本「付」。



菘　促織

もろこしにて、蕪菁のごとく、いづかたにても家々に種るものなり。こ

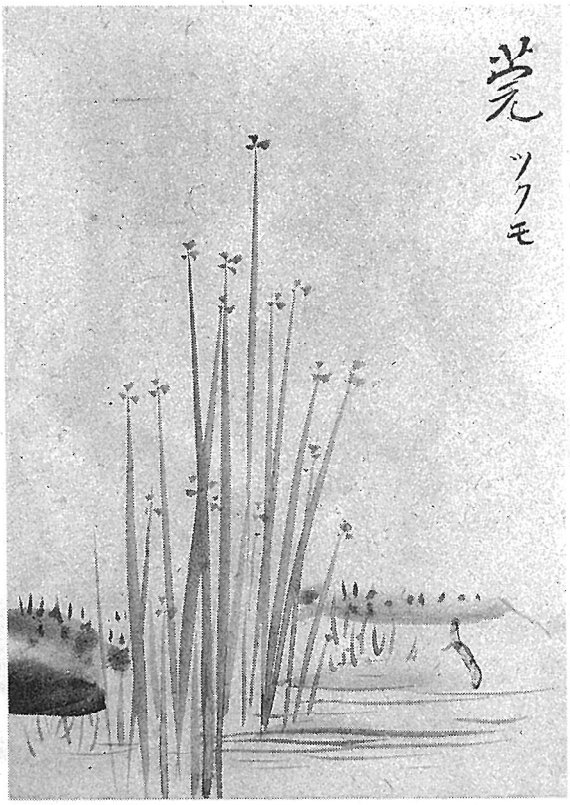
こにては、さしもあらず。唯、黄檗宗の寺院には必、これを種るなり。食菜にいたりてよきものなり。「タウナ」といふに、又二種あり。たけたかく、茎ふとく、葉をかきてとるものをわきて「タカナ」といふ。葉の大さは芋の葉ばかりも。賀茂の「酢ぐき」、長崎の「漬菜」などはみな「菘」なりと聞。



今、児童の玩弄して「キリギリス」といふものは「促織」なりけり。其声ギイチョイ機を織がごとし。人の機織をすすむるに似たり。故に「促織」とは名づけけらし。「促」は催なり。

莞　ツクモ

「灯心草」に似て大なるもの、「ツクモ」なり。今、蒲筵のごとく、織て用ゆ。「大日莞、小日蘭」といふ。古人の言よくあたれり。これもくさぐさあやまてることのあればいふなり。



しのぶ

石にもおふる、古垣古屋にもおほる、古屋の宇のしのぶ草などおほく歌によめりしはみなこれなり。

今の人は蕨に似たる「イドグサ」といふものを「シノブ」なりと思へり。いづかたより出たるあやまりにか、「しのぶずり」はもと草のことには

あらぬをさらにまたあやまりをかさねたりや、いとうし。『本草』垣衣の説もあやまれり。



おがたま

俗名「珊瑚珠」てふ木あり。カシの類にて、からたちばな*のさましたる実なる。いにしへ、「おがたま」の木といへるはこれなりと聞。「丘珠」の



こころなるべし。

【校勘】○はな…懐徳堂本「花」。

楓

春は若芽の紅、秋は衰葉のもみづるものぞ、まことの「楓」にてぞありける。『楚辞』に「江水湛々兮上有楓」といへり。これに紅の文字はなけれども、この処の秋景をほめたることばなれば、紅葉にまぎれなし。それより後、「丹楓」「紅楓」と詩賦に入たるは、司馬相如、謝霊運以下、唐宋にいたるまで、ことごとくはあげつくすべくもあらず。皆ここもとの「楓」とおなじ。

『説文』に「漢宮殿中多植之。至霜後葉丹可観。故称楓宸」といへり。もろこしにて、いづかたにもあるべし。『本草』の「楓香脂」は外国より出るものにて、もと「楓」にはあらぬ物を、枝葉の「楓」に似たる処ありてや、「楓」の字をかりて其名とせしなり。天竺真臘など言語だに通ひがたき国にはじめより「楓」てふ文字あるべきやうなし。李時珍いはく、「楓木枝幹修聳。大者連数囲」。『南方草木状』にいはく、「楓実惟九真有之、用之有神乃難得之物」。これらみな薬用假称の「楓」にて、もろこしまことの「楓」にはあらず。今改めて名づけて「薬楓」といはばよろしかるべし。およそ『本草』は薬物を主とする書なれば、「楓」を香木の部にのせたり。さて、薬効をのみいひて、薬ならぬまことの「楓」のことはいとおろそかなり。この「薬楓」は秋とてももみぢぬものにや。註に漢宮丹楓のことを引たれど、それはもろこしの「楓」にて外国の「薬楓」にはあらず。これは註の謬なり。

【校勘】○名…懐徳堂本「外」に見える。○いはく…懐徳堂本「云」。○数…懐徳堂本なし。○の…懐徳堂本「之」。

〔懐徳堂本はこの後に「楓」部分の下書きらしき紙片、貼り紙あり。〕



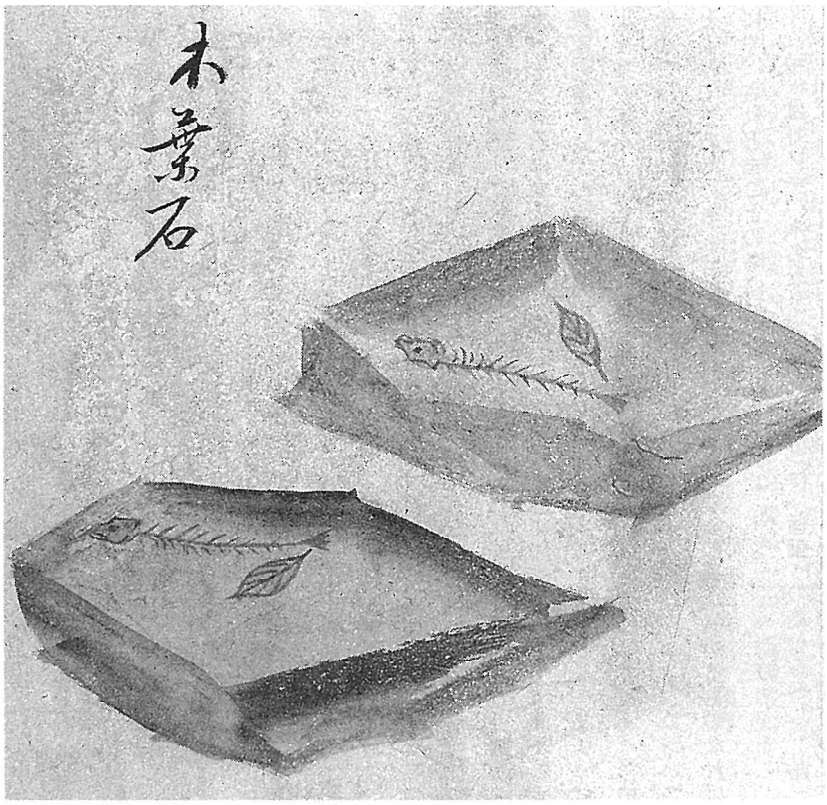


桂　木犀

たとへば「桂」はもろこしにおひ出たる木なり。後の世に「木犀」といふもの、是なり。さるを外国より香木をもて来て「桂」と名付てうるなり。これは薬効よき物にて其名たかくなりて、やがて其本名とぞなれりける。もろこしの人らも「木犀」を見てはまことの「桂」なりとはしらず。「木犀」は「桂」に似て「桂」にあらずといふめり。いでや、天竺暹羅の諸国に「桂」てふ文字あるべきやは。『楚辞』に「桂樹叢生兮山之幽」などおほくいひたる、皆「木犀」なりけり。今の世に医を営ぶ人らまづ『本草』に心をかたぶけて、其外のことをしらねば、桂も楓もみな夷産にてもろこしとわが国にはかつてなきものなりとぞいふめり。名実のたがひて真假のいりかはりたるは世になげかしきことなりや。



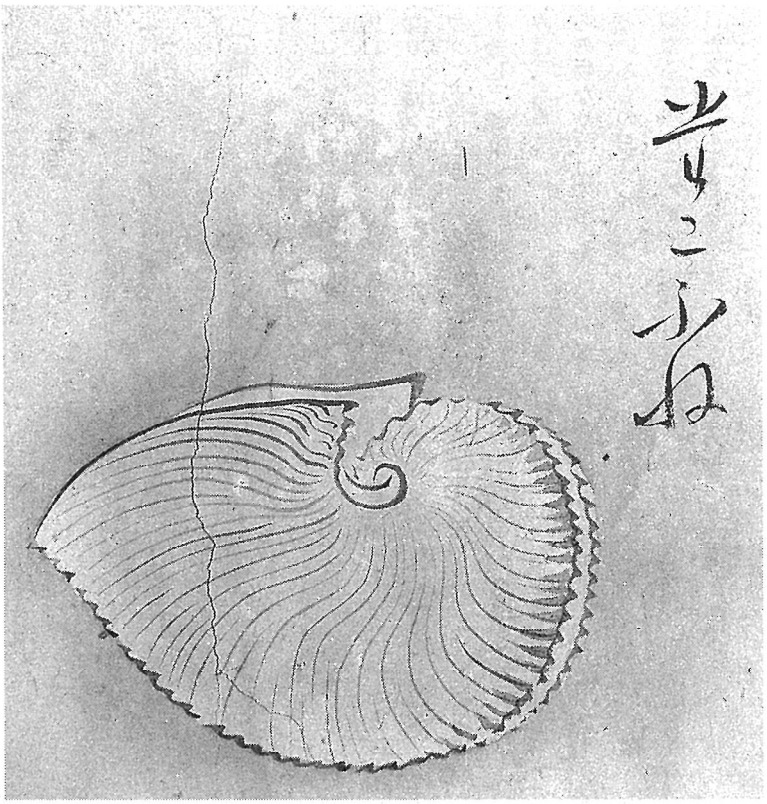
木葉石



こまかなる砥のごとき石をわりてみれば、中に木葉あり、ちいさき魚もあり。葉は朽はてて形のこりたるもあり。この石のある処は、泥のかたまりてよく石となるやうあるにや。大雨の時、川上より赤き泥流れ落れば、ここにてやがてかたまりて石となる。大雨のたびごとに其上にかさなりて、幾重ともなくおなじく*石となる。はじめの泥の上に落たりし木葉の、後の泥につつまれて魚もともに泥の中にて枯たるなり。だんだんにかさなりてなれる石なれば、破る時は其かさなりたる筋よりわかるるなり。

【校勘】*おなじく…懐徳堂本「同じく」。

たこふね



中なる虫は、すなはちこの貝の肉なりけり。外より入たる物にあらず。日和よき時は波の上に浮びて、おのれ殻の口にまたがり、脚を左右におろしてろかいとなし、頭をそびやかして帆となし、海上をはしる。この虫は「章魚」によく似たればとてなん、殻を「章魚舟」とは名づけしなるべし。

〔穀（補足）＊画なし。〕

「構」のことはすでに「穀」の下に見えたり。それにいひのこしたること*あれば、ここにいふなり。今、世俗に「梶」の字あり。「カヂ」とよめり。地の名に「梶原」あり。氏ともなれり。七夕の具に「梶葉」あり。端午の節に角黍を梶葉もてつつむことあり。されど「梶」はなき文字なり。この葉またく「構」なれば、「構」の譌文なるべし。「穀」と同物なり。飯餅の類、もろもろの食物をむかしはおほく木葉に盛りけらし。今、神事または農家の儀式にかかることの残りしことおほし。「梶」はもとよりなり。およそ葉の広く、物を盛に便ある物は、皆「カシハ」と名づけて用ゆ。杉柏松などは枝ながら用ゆ。それをはなれては、唯、「柏」のみを「カシハ」とよみてこの木の名とせり。「柏」はことさらこの用に便あるものなればにや。されどまことの名にはあらず。

「柏」はヒノキ。木名なり。「カシハ」とは「葉」の義なるべし。「葉」は「カス」ともよめり。「シク」ともよめり。されば「カヂ」は「カシ」の転音なるべし。今にては、「構」「柏」二木の名を「シ」と「チ」とにてわかちたるにぞ。世のならはしはかかることおほし。

「栲」は「構」の類なるべし。「栲」は「山樗皮厚一寸」ともろこしの文にもみえたり。いにしへ「栲衾」あり、「タクフスマ」とよめり。栲皮を績て織たる衾なるべし。穀布のたぐひにぞ。然れば「海士のたく縄」とよみたるは栲皮もて造たる縄にてぞあるべき。

【校勘】○懐徳堂本は、「と」の後に「の」がある。

〔橘　＊画なし。〕

「橘」は漢名なり。「たち花」は和名なり。「ミカン」は郷名なり。わが国にもとより生たるは「柑」のみなりし。後に外国にもとめて植たるは「橘」なり。「時じくかくのこのみ」などはこれをほめていひたることばなり。「ミカン」とは「蜜柑」の心もて名づけたるにぞ。けだし、「柑」に似ていとあまし。密の味ありとてなん、かくよびなしたるにて、「蜜柑」てふこのみは、もろこしにもなきものを、このくさぐさの名につけて「蜜柑」はべちの物なり。「橘」にあらず。薬に入るももろこしの*「橘」ならでは、などいふものおほし。くすしは何事もくすしめきたりや。いままた「柑」に似たるに小きこのみにたちばなの名をおびたるものあり。それは山賤のつけたる名にもやあらん。いといひかひなし。

【校勘】○も…懐徳堂本なし。

〔手稿本、中之島本にはこの後、二枚の画がある。ヨモギとツバキか？〕

＊本稿は、平成一八年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励費の成果の一部である。

（大阪府立工業高等専門学校助教授）